

教育の経緯と展望

工芸領域は平成 15 年度に（名称：クラフト領域として発足、令和元年に工芸領域と名称変更）学群、平成 19 年度に大学院博士前期課程に設置開講された筑波大学芸術系の中でも歴史の浅い領域である。元々は美術専攻特別プログラム（窯芸）が前身であり、コース領域を持たず、芸術系の共通教育として 40 年以上前から窯芸実習、演習などの授業が開講されていた。筑波大学創設計画時の通称青表紙本¹には研修部を付設する計画の中に専修科目として工芸（陶磁、金属工芸）の設置計画があったとの資料が残されており、大学創設当時から実素材を扱う造形分野の必要性が検討されていたと考えることができるだろう。また筑波大学の芸術専門学群以外の学生に向けた全学共通科目（芸術）においても、陶磁実習が筑波大学創設以来開講されており、工芸工作実習（陶磁・木工・ガラス）が筑波大学の教養教育として実技を学べる貴重な機会として授業が提供されてきた。さらに社会貢献に資するため、地域一般の市民に向けて公開講座（陶磁・ガラス）の開講が 40 年以上継続されている。

工芸領域設置から 15 年を経過し、授業運営及び授業に関連する設備がようやく整いつつあり、教育効果の成果も現れてきている。卒業生は 1 期生（H14 年度入学）が 6 名と領域発足当初としては、人数もまだ少なくゆったりと工房を使用する学生の印象はあったが、昨今では工芸基礎演習の履修希望者が毎年 40 名を越え、工芸概論の履修希望者が毎年 100 名を超えるなど、着実に工芸領域の教育が芸術系教育の中に浸透してきたと言えるだろう。

令和元年度の段階で卒業生（学群生）の総数は、87 名。修了生（博士前期課程）の総数は 30 名。海外からの留学生は 9 名、海外へ留学した学生は 6 名。今後はより海外との交流が盛んになることが予想される。また今後の教育の展望として、博士後期課程での工芸領域を主軸にした研究成果を求められており、工芸領域特有の素材や技法に対する専門性は確実に担保したまま、その専門性だけにとらわれることなく、総合大学である筑波大学の特徴を活かし、科学的なアプローチや心理学や医学的な見地と造形の関係を評価する方法の確立を基に、ものごとへの視線を多角的に持ち多様な造形表現が柔軟に発想・実現されることを望みたい。（982 文字）

¹ 『筑波大学の創設準備について－まとめ－』筑波新大学創設準備会 p.39,40 昭和 48 年 9 月 29 日発行